世界最終戦論

陸軍中將 石原莞爾述

特500
569

東亞聯盟協會關西事務所編
立命館出版部發行

特

0055357000

0055357-000

特５００－５６９

世界最終戦論

東亜聯盟協会関西事務所・編

立命館出版部

昭和１５．９

AJA

世界新秩序論

陸軍中將 石原莞爾述

東亞聯盟協會關西事務所編
立命館出版部發行

特500
569
特

176

月刊雜誌 東亞聯盟（新秩序建設の指導雜誌） 定價四十錢 送料六錢

東亞聯盟協會編 昭和維新論 定價三十錢 送料六錢

東亞聯盟協會編 東亞聯盟建設綱領 定價五十錢 送料六錢

杉浦晴男著 東亞聯盟建設綱領 定價五十錢 送料六錢

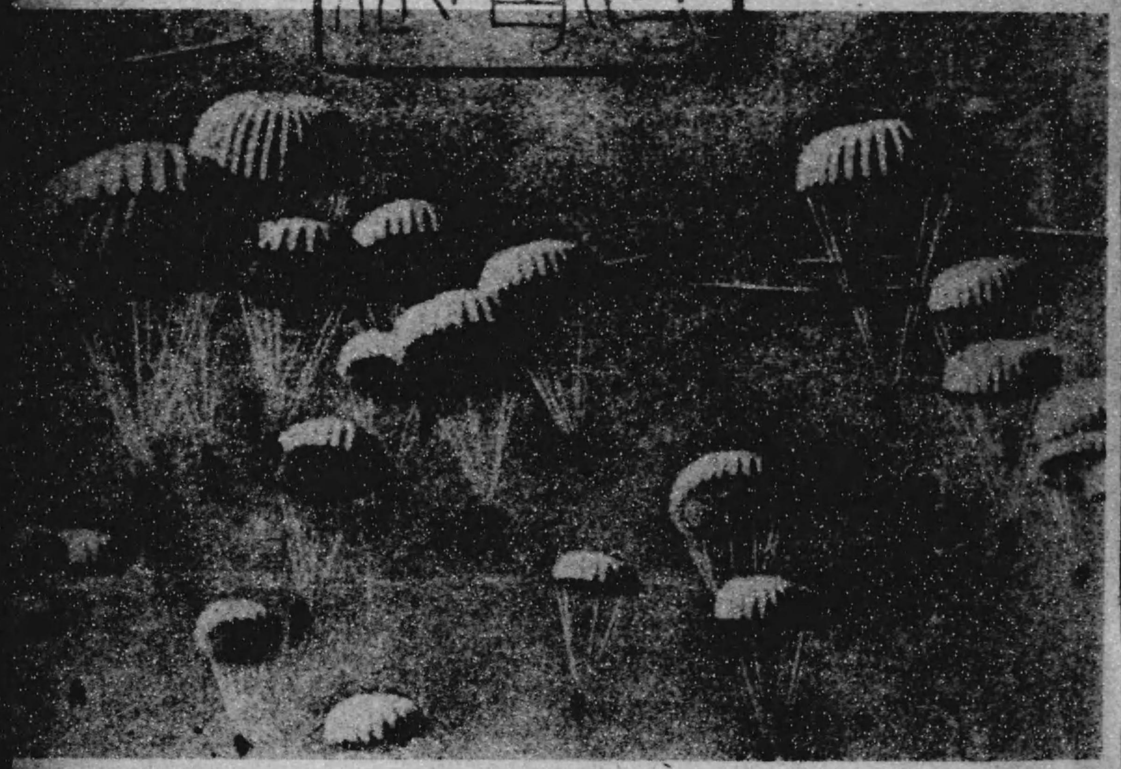
東京市赤坂區溜池五富士ビル
東亞聯盟協會發行

東京市銀座西二ノ一
立命館出版部發行

陸軍中將

石原莞爾 述

世界最終戰論



東亞聯盟協會調査部務所編

發賣 帝國書館

部版出

~~葉史7-993~~
特500-569

世界最終戰論

——人類の前史終らんとす——

戰爭は武力をも直接使用する國家の國策遂行の行爲であります。今アメリカは殆ど全艦隊をハワイに集中して日本を脅迫して居ります。どうも日本は米が足りない、物が足りないといつて弱つて居るらしい。もう一威し威せば日・支問題も日本側で折れるかも知れぬ。一つ脅迫してやれといふのでハワイに大艦隊を集中して居るのであります。詰りアメリカは彼等の對日政策を遂行する爲に海軍力を盛に使つて居るのでありますが、間接的の使用でありますから未だ戰爭ではあり

ません。

それで分り切つたことでありますが、戰爭の特徴は依然として武力戰にあるのです。併しその武力の價値が、それ以外の戰爭の手段に對してどれだけの位置を占めるかといふことに依つて戰爭に二つの傾向が起きて來るのであります。武力の價値が他の手段に較べて高い程戰爭は男性的で力强く、太く、短くなるのであります。言ひ換へれば陽性の戰爭、之を私共決戰戰爭と命名して居ります。所が色々の事情に依つて武力の價値がそれ以外の手段、卽ち政治的手段に對して絕對的でなくなる。比較的價値が低くなるに從つて戰爭は細く、長く、女性的に、卽ち陰性の戰爭になるのであります。之を持久戰爭といひます。

戰爭本來の眞面目は決戰戰爭であるべきですが、持久戰爭となる事情については單一でありませぬ。之が爲め同じ時代でも、ある場合には決戰戰爭が行はれ、ある場合には持久戰爭が行はれる事があります。然し兩戰爭に分るゝ最大原因は時代的影響でありまして、軍事上より見た世界歷史は決戰戰爭の時代、持久戰爭の時代を交互に現出して參りました。

戰爭のことに付きましては、あの喧嘩好きの西洋の方が本場らしいのでございます。殊に西洋では似た力を持つた强國が多數接壤して居り、且戰場の廣さも丁度手頃でありますから、決戰持久兩戰爭の時代的變遷がよくあらはれて居ります。日本の戰ひは「遠からん者は音にもきけ……」何とか云つて始める。戰爭やらスポーツやら分らぬ。私は戰爭の研究を特に戰爭の本場の西洋の歷史で考へてみようと思ひます。（卷末附表參照）

古代、ギリシヤ、ローマの時代は國民皆兵であります。さうして必ずしも西洋だけではありません。日本でも支那でも原始時代は社會事情が人間の理想的形態

を大體取つて居ることが多いらしいのでありまして、戰爭も同じことであります。ギリシャ、ローマ時代の戰術は極めて整然たる戰術であつたのであります。多くの兵が密集して方陣を作つて、さうして巧みにそれが進退を致しまして敵を壓倒する。今日でもギリシャ、ローマ時代の戰術は依然として軍事學に於ける研究の對象たり得るのであります。國民皆兵であり整然たる戰術に依つて、この時代の戰爭は決戰的色彩を帶びて居つたのであります。アレキサンダーの戰爭、シーザーの戰爭などは割合に政治の掣肘を受けないで決戰戰爭が行はれて居るのであります。

所がローマ帝國の全盛時代になりますと、國民皆兵の制度が逐次破れて來て傭ひ兵になつた。是が既に決戰戰爭的色彩を段々變化しつゝあつたのであります。斯ういふことを歴史的に考へれば、東洋も同じことであります。御隣りの支那では漢民族の最も盛であつた唐朝の中葉頃から國民皆兵の制度が紊れて、傭兵に墮落する。その時から漢民族の國家生活としての力が弛緩をして居ります。今日迄その狀況がずつと繼續しまして、今次日支事變の中華民國は非常に奮發をして勇敢に戰つて居ります。それでも未だどうも眞の國民皆兵には成り得ない狀況であります。長年文を尊び、武を卑しんで來た漢民族の惱みは非常に深刻なものでありますが、私はこの事變を契機としまして何とか昔の漢以前の漢民族に復ることを希望して居る次第であります。

前にかへりますが、斯くて兵制が紊れ政治力が弛緩して參りますと、折角ローマが統一した天下を耶蘇の坊さんに實質的に征服せられたのであります。それが中世であります。中世ギリシャ、ローマ時代に發達した軍事的組織は全部崩壞しまして騎士の個人的戰鬪になつてしまひました。一般文化も中世は觀方に依つて暗

黒時代でありますが、軍事的にも同じことであります。それが文藝復興の時代に入つて來る。文藝復興の時代は軍事的にも大きな革命がまいります。それは何であるかといふと鐵砲が使はれ始めたのです。祖先代々武勇を誇つて居た所謂名門の騎士も、町人の鐵砲一發でやられてしまふ。それでお士の一騎打ちの時代は必然的に崩壞してしまひ、再び昔の戰術が生れて來るのであります。是が社會的に、政治的に大きな變化を招來して來るのであります。

當時は特に十字軍の影響を受けて地中海方面、ラインの方面に商業が非常に發達して所謂重商主義の時代でございましたから、金が何より大事で、兵制は昔の國民皆兵に復らないで、ローマ末期の傭兵に復つたのであります。ところが新しく發展して來た國家は皆小さいものですから、さう澤山兵隊を常に養つて居れぬ。それでスイツルなどで兵隊商賣、戰爭の請負業といふものが出來て、戰爭をしようとしますと、國家は其請負業者から兵隊を傭つて來たのであります。さういふ商賣の兵隊では戰爭の深刻なる本性が發揮出來る譯はありません。必然的に持久戰爭に墮落をしたのであります。然し戰爭がありさうだからあそこから三百人傭つて來い。あれからも百人傭つて來い。成る丈け値切つて傭つて來いといふやうな方式では賴りないのでありますから、國家の力が增大するにつれ段々常備傭兵の時代になつたのであります。大體軍閥時代の支那の軍隊の樣なものであります。常備傭兵になりますと戰術が高度に技術化するのです。玄人の戰になる。巧妙な駈引の戰術が發達をして來ます。けれども何分矢張り金で傭つて來て居るのでありますから、當時社會統制の原理であつた專制を當時の戰術にそのまゝ利用せられたのです。

其形式が今でも日本の軍隊にも遺つて居ります。日本の軍隊は西洋流を習んだ

のですから自然の結果であります。例へてみれば號令をかけるときに劍を拔いて「氣を附け」とやります。「云ふことを聞かないと切るぞ」と威しを掛ける。勿論今日何人もそんな考へで劍を拔いて居るのではありませんが、此指揮の形式は西洋の傭兵時代に生れたものと考へます。刀を拔いて親愛なる部下に號令を掛けたといふことは日本流ではない。まあ必要があれば采配を振るのです。敬禮の際「頭右」と號令をかけ指揮官は刀を前に投げ出します。それは武器を投ずる動作です。刀を投げ捨てて「貴方には敵ひません」といふ意味を示した遺風であらうと思はれます。また步調を取つて步くといふことは專政時代の傭兵に敵彈の下を臆病心を押へつけて敵に向つて前進せしむる爲の訓練方法だつたのです。

金で傭はれて來る兵士に對してはどうしても專制的にやつて行かねばならぬ。兵の自由を許すことは出來ない。さういふ關係から鐵砲が段々發達して射擊を便にする爲にも、味方の損害を減ずる爲にも、隊形が段々橫廣くなつて深さを減じて來ましたが、この專制時代にはどうしても戰術が橫隊戰術から散兵戰術に飛躍することが困難であつた狀態であります。

橫隊戰術は先に云ひました通り最も高度の專門化であり、また非常に熟練を要するものです。何萬といふ兵隊を橫隊に並べる。吾々若い時に步兵中隊の橫隊分列をやるのに苦心したものです。何百個中隊何十個大隊が橫隊に並んで、それが敵前で動くことは非常な熟練を要することであります。戰術が煩瑣なものになつて專門化した事は恐るべき墮落でありました。それで仲々戰鬪が思ふ通りに出來ないのです。一寸した地形の障碍でもあればそれを克服することが出來ない。

そんな關係で戰場に於ける決戰は仲々容易に出來ない。又さういふ風に長年養つて商賣化した兵隊は非常な高價なものであります。それを濫費することは、ど

うも君主としては惜しい。成るべく斬り合ひはやりたくない。さういふやうな考へから持久戰爭の傾向が逐次徹底して來るのです。

三十年戰爭や、この時代の末期に出て來た持久戰爭の最大名手であるフリードリヒ大王の七年戰爭等は、その代表的なものであります。持久戰爭では會戰、詰り斬り合ひで勝負を附けるか、或は會戰を成べくやらないで機動に依つて敵の後に迫り、犧牲を尠くしつゝ逐次敵の領土を蠶食する。この二つの手段が主として採用せられるのであります。フリードリヒ大王は、最初は當時の風潮に反して會戰をかなり使つたのでありますが、とうとう流石のフリードリヒ大王も、多く血をみる會戰で戰爭の運命は仲々決定し兼ね、遂に機動主義に傾いて來たのであります。

フリードリヒ大王を尊敬し、大王の機動演習の見學を許された事もありましたフランスのある有名な軍事學者は、一七八九年次の如く云つて居るのです。「大戰爭は今後起らざるべく、最早會戰を觀ることはないだらう。」將來は大きな戰爭は起きまい。又戰爭が起きても會戰なんといふ血腥いことはやらないで、主として機動で、成べく兵の血を流さないで戰爭をやるやうにするだらうといふ意味であります。

即ち女性的陰性の持久戰爭の思想に徹底をしたのであります。併し世の中はあることに徹底した時が革命の時なんです。皮肉にもこの軍事學者がさういふ發表をして居る一七八九年は、フランス革命勃發の年であります。さういふ風に持久戰爭の徹底した時にフランス革命が起つたのであります。

フランス革命當時、フランスでも無論戰爭の爲めには傭ひ兵がよいと思つて居た。所が多數の傭兵を傭ふには非常に金が掛る。然し殘念ながら、當時世界を敵

とした貧乏國フランスは、とてもそんな金はないのです。何とも仕樣がない。國は滅びてしまふから、革命の意氣に燃えたフランスは、とうとう民衆の反對があつたのを押し切りまして、徵兵制度を强行したのであります。それで暴動迄起きたのでありますが、活氣あるフランスは、それを彈壓をしまして兎に角百萬と稱する大軍――實質はそれだけなかつたと云はれて居りますが――を集めて、四方からフランスに殺到して來る熟練した職業軍人の聯合軍に對抗したのであります。その時の戰術は先に申しました横隊です。横隊が餘り窮屈なものですから横隊より縱隊がよいとの意見も若干出て居たのでありますが、軍事界では横隊論者が依然絕對優勢な位置を占めて居りました。

所が横隊戰術は熟練の上に熟練を要するので、急に狩り集めて來た百姓に、そんな高級な戰術が出來つこはないのです。善いも惡いもない。いけないと思ひながら縱隊戰術を採つたのです。散兵戰術を採つたのです。縱隊では射擊は出來ませんから、前に散兵を出して射擊をさせ、其後方に運動の容易な縱隊を運用したのであります。横隊戰術から散兵戰術へ變化したのであります。先申します通り決してよいと思つてやつたのではありません。己むを得ずやつたのです。所がそれが時代の性格に最も能く合つて居たのであります。革命の時は大體さういふものだと思はれます。

古い戰術の横隊戰術が非常な價値あるもの、高級なものと皆常識で信じて居つた時に、新しい時代が來て居つたのです。それに移るのがよいと思つて移つたのでない。どうも是は低級なものだと思ひながら己むを得ずやらざるを得なくなつてやつたのです。それで先申しました地形の束縛を受けて敵に決戰を强制することの困難が克服されまして、用兵上非常な自由を獲得したのみならず、散兵戰術

は自由に憧れた佛國民の性格によく適合しました。

加之、傭ひ兵の時代と違つて、たゞで兵隊を狩り集めて來るのですから、大將は國王の財政的顧慮等に制肘せらるゝ事なく、思ひ切つた作戰をなし得る事となつた譯であります。斯ういふ關係から十八世紀の持久戰爭でなければならなかつた理由は自然に解消してしまひました。

所がさういふやうに變つても敵の大將は無論のこと、新しい軍隊を指揮したフランスの大將も依然として十八世紀の古い戰略をその儘使つて居つたのであります。土地を攻防の目標とし、廣い正面に兵力を分散し、極めて愼重に戰をやつて行く方式を執つて居たのです。この時フランス革命によつて生じた軍制上、戰術上の變化を達觀して、その直感力により新しい戰略を發見し、果敢に運用したのが不世出の軍略家ナポレオンであります。卽ちナポレオンは當時の用兵術を無視し要點に兵力を集めて、敵線を突破し、突破が成功せば、逃ぐる敵を何處迄も追つかけて行つて敵の軍隊を叩きつける。敵の軍隊を擊滅すれば戰爭の目的は達成せられ、土地を作戰目標とする必要等はなくなります。

敵の大將はナポレオンが一點に兵を集めて遮二無二突進して來ると、兵法上そんなことはどうも無理ぢやないか。亂暴な話ぢや。是は兵法を知らぬなんどと云つて居る間にドンドン自分はやられてしまつた。だからナポレオンの戰の勝利といふものは對等のことをやつて居るのではないのです。在來と全く變つた戰略を巧みに活用したのであります。敵の意表に出でゝ、敵軍の精神に一大電擊を加へ、ナポレオンは遂に戰爭の神樣になつてしまつたのであります。白い馬に乘つて戰場に出て來る。それだけで敵は精神的にやられてしまつた。猫に睨らまれた鼠の如く竦んでしまひます。

さういふ風にしてそれ迄は三十年戰爭、七年戰爭等長い戰が當り前であつたのに、一擧に數週間、數ヶ月で大きな戰爭の運命を決定する、決戰戰爭の時代になつたのであります。でありますから、フランス革命がナポレオンを生み、ナポレオンがフランス革命を完成したといふべきです。

特に皆さんに注意して戴きたいのは、フランス革命の軍事上の變化の原因は兵器の進歩ぢやありません。この前中世暗黑時代から文藝復興の時に軍事上の革命が起つたのは鐵砲の發明といふ兵器の關係でありました。けれどもフランス革命で横隊戰術から散兵戰術、持久戰爭から決戰戰爭に移つたのは兵器の進歩ぢやありません。フリードリヒ大王の使つた鐵砲はナポレオンの使つたものと大差ありません。要之社會制度の變化が軍事上の革命を來したのであります。この間、帝大の教授方がこの事につき「何か新兵器があつたでせう」と申しますから「新兵器は無い」といつて頑張りますと、そんなら兵器の製造能力に革命があつたのでせうかと申されます。「然しそんな事もありませんでした。」と答へざるを得ないのです。兵器の進歩に依つてフランス革命を來したことにしなければ學者にはどうも都合が惡いらしいのでありますが、御都合が惡くても現實は致し方はないのであります。

プロイセン軍はフリードリヒ大王の偉業に自惚て居たのでしたが、一八〇六年エーナーでナポレオンに徹底的にやられてから、始めて夢から醒め、科學的性格を活かしてナポレオンの用兵を研究し、ナポレオンの戰術を眞似し出したのであります。さあさうなると、殊にモスコー敗戰後は、遺憾ながらナポレオンはドイツの兵隊にさう容易に勝てなくなつてしまつたのであります。世の中では末期のナポレオンは淋病で活動が鈍つたとか、用兵の能力が低下したとか、いゝ加減な

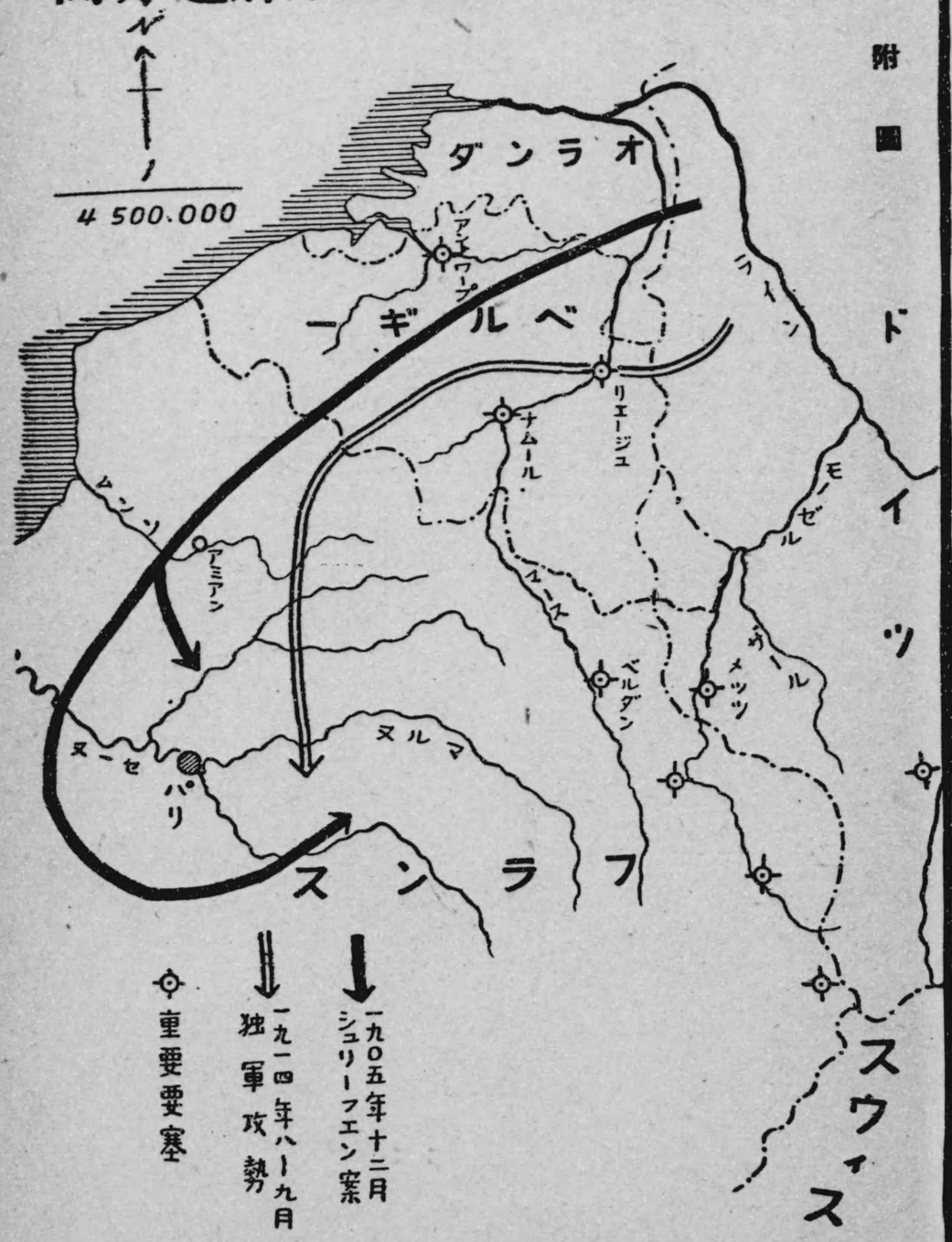
ことを云ひますけれども、ナポレオンの軍事的才能は年とともに發達したのであります。然し相手もナポレオンのやることを覺えてしまつたのです。人間はさう違ふ者ではありません。皆さんの中にも秀才と、秀才でない人もありますけれども大した違ひぢやありません。ナポレオンの大成功は、大革命の時代に世に率先して新しき時代の用兵術の根本義を把へた結果であります。天才ナポレオンも、もう二十年後に生れたなら、コルシカの砲兵隊長位で死んでしまつただらうと思ふのです。諸君のやうに大きな變化の時生れた人は非常に幸福であります。此の辛福を感謝せねばなりません。ヒットラーやナポレオン以上になられる特別な機會に生れたのであります。

フリードリヒ大王とナポレオンの用兵術を徹底的に研究したクラウゼウィッツといふドイツの軍人が近代用兵學を組織化したのであります。それから以後ドイツが西洋軍事學の主流になります。さうしてモルトケのオーストリアとの戰爭（一八六六）、フランスの戰爭（一八七〇―七一）等素晴しい決戰戰爭が行はれました。それよりシュリーフェンといふ參謀總長が長年ドイツの參謀本部を牛耳つて居りまして、ハンニバルのカンネ會戰を模範とし、敵の兩翼を包圍し、騎兵を其の背後にすゝめ敵主力を包圍殲滅すべきことを强調し、決戰戰爭の思想に徹底して、歐洲戰爭に向つたのであります。

シュリーフェンが一九一三年歐洲戰爭の前に死んで居ります。詰り第一次歐洲戰爭は決戰戰爭發達の頂點に於て勃發したのです。何人も戰爭は至短期間に解決するのだと思つて歐洲戰爭に向つたのであります。ぼんくら迄さう思つた時にはもう世の中は變つて居るのです。有ゆる人間の豫想に反して四年半の持久戰爭になりました。

然し今日靜かに研究して見ると、第一次歐洲大戰前、持久戰爭に對する豫感が潜在し初めて居たのであります。ドイツでは戰前既に「經濟動員の必要」が論ぜられて居りました。又シュリーフエンが參謀總長として立案した最後の對佛作戰計畫である一九〇五年十二月案には、アルサス、ロートリンゲン地方の兵力を極端に減少してベルダン以西に主力を用ひ、パリを大兵力を以て攻圍した上、更に七軍團（十四師團）の强大な兵團を以てパリ西南方より遠く迂回、敵主力の背後を攻擊する眞に雄大なものでありました（附圖參照）。ところが一九〇六年參謀總長に就任したモルトケ大將の第一次歐洲大戰初頭に於ける對佛作戰は、御承知の通り開戰初期は破竹の勢を以てベルギー、北フランスを席卷して長驅マルヌ河畔に進出、一時ドイツの大勝利を思はしめたのでありましたが、ドイツ軍配置の重點はシュリーフエン案に比し甚しく東方に移り、其右翼はパリーにも達せず、敵

附圖　ドイツ對佛作戰軍主力前進方向



のバリ方面よりする反擊に遇ふや脆くも破れて後退の止むなきに至り、遂に持久戰爭となりました。此點についてモルトケ大將は、甚しく批難せられて居るのであります。慥かにモルトケ大將の案は決戰戰爭を企圖したドイツの作戰計畫としては甚だ不徹底なものといはねばなりませぬ。シユリーフエン案を決行する鐵石の意志と、之に對する十分なる準備があつたならば、第一次歐洲大戰も決戰戰爭となつてドイツの勝利となる公算必ずしも絕無でなかつたと思はれます。

然しこの計畫變更にも私は持久戰爭に對する豫感が無意識の裡に案外力强く作用して居た事を認めるものであります。卽ちシユリーフエン時代には佛軍は守勢をとると判斷せられたのに、其後佛軍はドイツの重要產業地帶であるザール地方への攻勢をとるものと判斷せらるゝに至つた事が、此方面への兵力增加の原因であります。又大規模な迂回作戰を不徹底ならしめたのは、モルトケ大將がシユリーフエン元帥の計畫では重大條件であつた和蘭の中立侵犯を斷念したことが、尤も有力な原因となつて居るものと私は確信するものであります。ザール地方鑛工業地帶の掩護、特に和蘭の中立尊重は、戰爭持久の爲めの經濟的考慮に據つたのであります。卽ち決戰を絕叫しつゝあつたドイツ參謀本部首腦部の胸の中には、彼等がはつきり自覺しない間に持久戰爭的考慮が加はりつゝあつた事は甚だ興味深いものと思ひます。

四年半は三十年戰爭、七年戰爭に比べて短いやうでございますが緊張が違ふ。昔の戰爭は三十年戰爭等と申しましても中間に長い休みがあります。七年戰爭でも大體冬になれば、傭ひ兵をさう寒い所に置くと皆逃げてしまひますからお互ひに休むのです。所が過去の第一次歐洲戰爭には徹底せる緊張が四年半續きました。

何故持久戰爭になつたかと申しますと、第一兵器が非常に進步しました。殊に

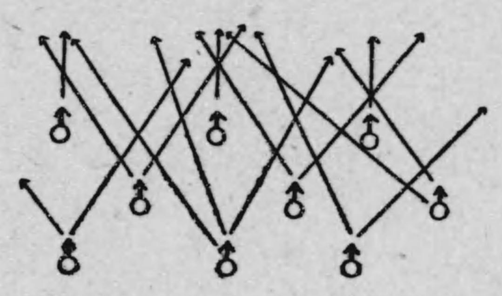
自動火器、機關銃といふものは極めて防禦に適當な兵器であります。だからして簡單に正面が拔けない。第二にフランス革命頃は、國民皆兵でも兵數はさう多くはなかつたのですが、段々增加して第一次歐洲戰爭には既に健康な男は全部戰ひに出る。歷史で未だ曾てなかつた所の大兵力となつた譯です。で正面が拔けない。さればといつて側面に廻つて包圍しようとすると戰線は兵力の增加によつて瑞西から北海迄のびて包圍することも出來ない。突破も出來なければ包圍も出來ない。それで持久戰爭になつたのであります。

曩にフランス革命の時は社會の革命が戰術に變化を及ぼして、戰爭の性質が持久戰爭から決戰戰爭になつたが、今度は兵器の進步、兵力の增加から決戰戰爭が持久戰爭になつてしまつたのであります。

四年餘の持久戰爭であつたが、十八世紀頃の持久戰爭の樣に徒らに會戰を避ける樣な事はなく、血戰が連續行はれ、其間に自然に新兵器による新戰術が生れました。

砲兵力の進步が敵散兵線の突破を容易にするから防者は數段に敵の攻擊を支へる事となり、所謂數線陣地となつたのであるが、それでは結局敵から各個に擊破せらるる事となる爲め、自然に逐次抵抗の數線陣地の思想から面式の縱深防禦の新方式が生れました。

卽ち自動火器を中心とする一分隊位（戰鬪群）の兵力が大間隔に陣地を占め、更に之を縱深に配置するのであります。（挿圖參照）かくして兵力の分散により敵の砲兵火力の效力を減殺するのみならず、此縱深に配置せられた兵力は、互に巧妙に相扶け合ふことによつて攻者は單に正面から丈けでなく、前後左右より不規則に不意の射擊を受くる事となり、攻擊を著しく困難にする譯です。



此の如き敵を攻撃するものも在來の様な線の散兵では大損害を受けるから、十分縱深に疎開し、矢張り面の戰力を發揮することにつとめます。横隊戰術は前申しました如く專制を其指導精神とし、散兵戰術は各兵各單位に十分自由を與へ、其自主的活動を奬勵する自由主義の戰術であります。然るに面式の防禦をして居る敵を攻撃するに各兵各單位の自由に委して置いては大なる混亂に陷るから、指揮官の明確なる統制が必要となりました。面式防禦をするのは一貫せる方針に基く統制の必要である事は申す迄もありません。

即ち今日の戰術の指導精神は統制であります。然し横隊戰術の如く强權を以て各兵の自由意志を押へ盲從せしむるものとは根本に於て相違し、各單位各兵の自主的、積極的、獨斷的活動を可能にする爲め明確なる目標を指示し、混雜と重複を避くるに必要の統制を加ふるのであります。自由を抑制する爲の統制でなく、自由活動を助長する爲めであると申すべきです。

右の如き新戰術は第一次歐洲大戰中に自然に發生し、戰後特に蘇聯の積極的研究が大なる進歩の動機となりました。歐洲大戰の犧牲を免れた日本は一番遲れて新しき戰術を採用し、今日熱心に其研究訓練に邁進して居る次第であります。

又歐洲大戰中戰爭持久の原因は西洋人の精神力の薄弱に基くもので、大和魂を以てせば即戰即決可能といふ勇ましい議論も盛んでありましたが、逐次眞相明かとなり、數年來戰爭といへば長期戰爭、總力戰で、武力のみでは戰爭の決がつかないことが常識になり、第二次歐洲大戰の初期皆持久戰爭と考へて居ましたが、最近ドイツ軍の大成功により大きな疑問を生じて參りました。

第二次歐洲戰爭では、ドイツの所謂電擊作戰が波蘭、諸威の弱小國に對し迅速に決戰戰爭を强行し得た事は勿論異とするに足りません。然し佛英軍との間には恐らくマジノ、ジックフリードの線で相對峙しお互に其突破至難で持久戰爭になるものと考へたのであります。

ドイツが和蘭・白耳義に侵入することはあつても、それは英國に對する作戰基地を得る爲で、聯合軍との主力の間に眞の大決戰行はるべしとは考へませんでした。然るに五月十日以來のドイツの猛擊は瞬時に和蘭・白耳義を屈伏せしめ、難攻と信ぜられたマジノ延長線を突破して、白耳義に進出した佛英軍の背後に迫り忽ち之を擊滅し、更に矛を轉じてマジノ線以西の地區から巴里に迫つて之を拔き、和蘭侵入以來僅か五週間で强敵佛國に停戰を乞はしむるに至りました。卽ち世界史上未曾有の大戰果を擧げ、佛國に對しても見事な決戰戰爭を遂行したのであります。然し、果して之が今日の戰爭の本質であるかと申せば、私は敢て然らずと答へるのであります。

第一次歐洲大戰に於ては、ドイツの武力は聯合軍に比し多くの點で極めて優秀でありましたが、兵力は遙かに劣勢であり、戰意は双方相讓らない有樣で大體互格の勝負でありました。所がヒットラーがドイツを支配して以來、眞に擧國一致、全力を擧げて軍備の大擴充に努力したのに對し、自由主義の佛英は漫然之を見送つた爲めに、空軍は質量共に斷然ドイツが甚しく優勢であることは世界齊しく認めて居たのでありますが、今度いよいよ戰爭の幕を開けて見ると、ドイツ機械化兵團が極めて精鋭且優勢であるのみならず、一般師團の數も佛英側に對しドイツは恐らく三分ノ一以上の優勢を保持して居るらしいのです。而も英雄ヒットラーにより全國力が完全に統一運用せられて居るのに反し、數年前ドイツがライン進

駐を決行しました時、佛國が斷然ベルサイユ條約に基きドイツに一擊を加ふべく主張したのに對し、英國は反對し、其後も作戰計畫につき事毎に意見の一致を見なかつたと信ぜられます。佛國の戰意はこんな關係で第一次歐洲大戰の如くでなく、マジノ延長線も計畫に止まり殆ど構築されて居なかつたらしいのです。

戰力の著しく劣勢なる佛國は、國境にて守勢をとるべきだつたのでせう。恐らく軍當局は之を欲したのでせうが、政略に制せられて白耳義に前進し、ドイツの電擊作戰の爲め有力なる白耳義派遣軍が徹底的打擊を受け、英軍は本國に逃げかへる事となりました。英國が本氣でやる考なら、本國などは海軍に一任し、全陸軍は佛國に作戰すべきであります。英佛の感情は恐らく極めて不良となつた事と考へられます。かくてドイツが南下するや、佛軍は遂に抵抗の實力なく、名將ペタン將軍を首相としてドイツに降伏したのであります。

かく考へて見れば、今次の戰は全く互格の勝負ではなく、聯合側の物心兩面に於ける甚しき劣勢が必然的に此結果となつたのであります。抑々持久戰爭は大體互格の戰爭力を有する相手の間に於てのみ行はれることは申す迄もありません。第一次歐洲大戰では開戰初期の作戰はドイツの全勝を思はしめたのでしたが、マルヌで佛軍の反擊に破れ、又最後の一九一八年ルーデンドルフの大攻勢は此度の北佛に於ける戰場附近で佛英軍に大打擊を與へ、一時は全く敵を中斷して戰爭の運命を決し得るのではないかとさへ見へたのでしたが、遂に失敗に終つたのでした。兩軍は大體互格で持久戰爭となり、ドイツは遂に經濟戰に破れたのであります。

芬蘭は蘇聯に屈伏はしたものゝ極めて劣勢の兵力で長時日蘇軍の猛擊を支へ、今日の兵器に對しても如何に防禦威力の大なるかを示しました。又白耳義戰線でも未だ詳細は判りませぬが、ブルッセル方面から敵の正面を攻めたドイツ軍は大

なる抵抗に遇ひ、容易には敵線を突破出來なかつた樣子です。第一次歐洲大戰に比し、空軍の大進步、戰車の進步等がありますが、今日も依然十分準備し、決心して戰ふ敵線の突破は至難で、戰爭持久に陷る公算多く、依然持久戰爭の時代と觀察するのであります。

吾々は第一次歐洲大戰以後持久戰爭の時代に生きて居るのであります。戰術から云へば戰鬪群の戰術、戰爭より云へば持久戰爭の時代に吾々は呼吸して居るのであります。第二次歐洲戰爭其者は決戰戰爭となつても、時代の本質はまだ持久戰爭の時代である事は前申した通りでありますが、軈て次の決戰戰爭の時代に移ることは、今迄御話した歷史的觀察に依つて疑ひのない所であります。

その決戰戰爭がどんな戰爭であるだらうか。之を今迄のことから推測して考へてみませう。兵數は今日の時代は男といふ男は全部戰爭に參加するのでありますが、この次の戰は男ばかりぢやない。女も、更に徹底すれば老若男女全部戰爭に參加することになります。

戰術の變化を觀ますと、密集隊形、方陣から橫隊になり散兵になり、戰鬪群になつたのであります。之を幾何學的に觀察してみると、方陣は點であり、橫隊は實線であり、散兵は點線であります。戰鬪群の戰法は今御說明したことに依つて明な如く面の戰術であります。點線から面に來たのです。この次の戰爭は體の戰法であると想像されます。

さうしてその戰鬪の指揮の單位はどういふ風であるといふと、必ずしもこの通りではなかつたのでありますが、理窟としては密集隊形の指揮の單位は今のやうに擴聲器が發達すれば「前へ進め」と三千人の聯隊が動くかも知れぬが先づ聲のよい人でも大隊が單位であります。吾々若い時に盛んにこの大隊密集敎練をやつ

たものであります。横隊になると大隊ではどんな聲のよい人でも號令が通りません。指揮の單位は中隊であります。次の散兵となると中隊長ではとても號令は掛りません。小隊長が號令を掛けねばいけません。で指揮の單位は小隊長になつたのであります。今度の戰鬪群の戰術は何か、明瞭に分隊長、今日本で云へば輕機一挺と鐵砲十何挺を持つて居る分隊長が單位であります。大隊、中隊、小隊、分隊と逐次小さくなつて來た指揮單位は、この次は個人であるとみるのが正當であらうと思ひます。

單位は個人で量は全國民といふことは、國民の持つて居る爭鬪力を全部最大限に使ふ譯です。さうしてその戰爭の遣り方は體の戰法卽ち空中戰を中心としたものでありませう。體以上のものは吾々は分らないのです。王仁三郎さんのやうな靈界の御分りになる方とか、幽靈とかの世界は吾々普通の人間には分らないこ

とです。要するに此の次の決戰戰爭は人類戰爭の發達の極限に達するのであります。

人類の戰爭發達の極限に達するこの次の決戰戰爭で戰爭が無くなるのです。人間の爭鬪心は無くなりません。爭ひの考へが無くならんで戰爭が無くなるといふのはどういふことか。國家の對立が無くなる。卽ち世界がこの次の決戰戰爭で一つになるのであります。

是迄の私の說明は突飛だと思ふ方があるかも知れませんが、私は理論的に正しいものであることを確信する次第であります。戰爭の發達の極限が戰爭を不可能にする。例へば戰國時代の終りに日本が統一せられたのは軍事上の兵器の進步の結果であります。卽ち戰國時代の末に信長、秀吉、家康といふ世界歷史でも最も優れた三人の偉人が一緒に日本に生れて來ました。三人の協同作業です。信長が

優れたあの天才的の閃きで、大革新を妨ぐる堅固な殼を打ち割りました。割つた後も餘り天才振りを發揮せられると困ります。それで明智光秀が信長を殺した。信長が死んだのは用事が終つたからであります。それで秀吉が荒削りで日本の統一を完成し、朝鮮征伐迄やつて統一せる日本の力を示しました。そこに家康が出て來てうるさい婆さんのやうに萬事キチンと整頓してしまつた。信長、秀吉の考へた如く德川は皇室中心主義を實行しなかつたのは遺憾千萬ですが、この三人で兎も角日本を統一したのであります。なぜ統一が可能であつたかと云へば、種ヶ島へ鐵砲が來た爲であります。幾ら信長や秀吉が偉くても鐵砲がなくて、槍と弓だけであつたならば旨く行きません。信長は時代を達觀して尊皇の大義を唱へ、日本統一の中心點を明かにしましたが、彼は更に今の堺から鐵砲を大量買ひ求めて統一の基礎作業を完成しました。

今の世の中でも、若しもピストル以上の飛び道具を全部なくしたならば、選擧の時には恐らく政黨は演壇に立つて言論戰なんかやりません。言論では勝負が遲い。必ず腕力を用ふる事になります。が併し警察はピストルを持つて居る。兵隊さんは機關銃を持つて居る。如何に劍道、柔道の大家でも是では駄目。だから甚だ迂遠な方法であるが、言論戰で選擧を爭つて居るのです。兵器の發達が世の中を泰平にして居るのです。この次の凄い決戰戰爭でとても人類が戰爭をやることは出來ないといふことになる。そこで始めて世界の人類が長く憧れて居つた本當の平和に到着するのであります。

要するに世界の一地方を根據とする武力が、全世界到る處に對し迅速に其威力を發揮し抵抗するものを屈伏し得る樣になれば世界は自然に統一せらるる事となります。

然らばその決戰戰爭はどういふ形を表はすかを想像してみます。戰爭には老若男女全部參加する。老若男女だけでない。山川草木全部戰爭の渦中に入るのです。然し女でも子供でも全部滿洲國や西比利亞又は南洋迄行つて戰爭をやるのではありません。戰爭には二つの事が大事です。

一つは向ふを切ること。損害を與へること。も一つは損害に對して我慢することです。即ち敵に最大の損害を與へ、自分の損害に堪へ忍ぶことであります。此見地から次の決戰戰爭には敵を打つものは少數の優れた軍隊でありますが、我慢しなければならないものは全國民となるのです。今日歐洲大戰でも空軍による決戰戰爭の自信力がありませんから、爆擊は無防禦の都市は攻擊しない。軍事施設を爆擊だとか言つて居りますけれどもいよいよ眞の決戰戰爭の場合には忠君愛國の精神で、死を決心して居る軍隊等は有利な目標でありません。尤も弱い人々、尤も大事な國家の施設が攻擊目標となります。工業都市、政治の中心さういふ所を徹底的にやるのです。でありますから老若男女・山川草木・豚も・鷄も同じにやられるのです。かくて眞に空軍による徹底せる殲滅戰となります。國民は此慘狀に堪え得る鐵石の意志を鍛錬しなければなりませぬ。又今日の建築は危險極まりないことは衆知の事實であります。國民の徹底せる自覺により國家は遲くも二十年を目途とし主要都市の根本的防空對策を斷行すべきことを強く提案致します。官憲の大整理、都市に於ける中等學校以上の全廢(教育制度の根本革新)、工業の地方分散等により都市人口の大整理を行ひ、必要なる部分は市街の大改築を强行せねばなりません。

今日のやうに陸海軍などが存在してゐる間は最後の決戰戰爭にはならないのです。それ動員だ、輸送だなどと間ぬるいことでは駄目であります。軍艦の樣に太

平洋をのろのろ十日も二十日も掛つては問題になりません。併し今の空軍ぢやとてもいけません。又假に飛行機が發達して今ドイツがロンドンを大空襲をして空中戰で戰爭の決をつけ得た所で、恐らくドイツとロシアの間は困難であります。ロシアと日本の間も亦困難、更に太平洋を差挾んだ所の日本とアメリカの間を飛行機で決戰するのは未だ未だ仲々遠いのであります。一番遠い太平洋をさしはさんで空軍による決戰の行はれる時が人類最後の一大決勝戰の時であります。即ち無着陸で世界をぐるぐる廻れるやうな飛行機が出來る時代であります。それから破壞の兵器もドイツが今度リエージュの要塞等で使つたあんなものぢやまだ問題になりません。もつと徹底的な一發中ると何萬人ペチャンとやられる所の、私共想像出來ないやうな大威力のものが出來ねばいけません。

飛行機は無着陸で世界をグルグル廻る。而も破壞兵器は最も新鋭なもの、例へば今日戰爭になると次の朝、夜が明けてみると敵國の首府や主要都市は徹底的に破壞せられて居る。その代り大阪も、東京も、北京も、上海も、廢墟になつて居りませう。凡べて吹き飛んでしまふ……。さういふ位の破壞力のものであらうと思ひます。戰爭は短期間に終る。それ精神總動員、總力戰、武力戰だけでは戰爭が勝負が付かない。そんなことをいふ持久戰爭では問題にならない。降るとみて笠取る隙もなくやつつけてしまふのであります。此の如き決戰兵器を創造し、此の如き慘狀に堪へ得る者が最後の優者であります。

西洋歷史を大觀すれば、古代は國家の對立からローマが統一したのであります。それから中世はそれを耶蘇の坊さんが引受けて、耶蘇の坊さんが威力を失ひますといふと、新しい國家が發生してまゐりました。國家主義が段々發展して來て、フランス革命の時は一時世界主義が唱道せられた譯です。必ず斯ういふ風になつ

て來ます。フランス革命ではゲーテとかナポレオンとか本當に世界主義を理想としたのでありますが、結局それは目的を達しないで國家主義が全盛時代になつて第一次歐洲戰爭を迎へました。

歐洲戰爭の深刻なる破壞的體驗に依つて再び世界主義である國際聯盟の實驗が行はるゝ事となりました。急に其處迄は達しかねて國際聯盟は空文になつたのであります。併し世界は歐洲戰爭前の國家主義全盛の時代迄は逆轉しないで、國家聯合の時代になつたと私共は云つて居るのであります。大體世界は四つになるやうであります。

第一はソビエット聯邦。申す迄もなく社會主義國家の聯合體であります。マルクス主義に對する世界の魅力は失はれましたが、二十年來の經驗に基き特に第二次歐洲戰爭に乘じ獨特の活躍をなしつゝある蘇聯の實力は絶對に輕視出來ませぬ。第二は米洲であります。民族協和の國、合衆國を中心とし、南北アメリカを一體にしようとしつゝあります。勿論中南米の民族的關係、それから合衆國よりも寧ろヨーロッパ方面と經濟上の關係の濃厚な南米の諸國に於ては、合衆國を中心とする米洲の糾合に反對する運動は相當強いのでありますけれども、併し大勢は着々として米洲の聯合に進んで居ります。

次にヨーロッパはどうであります。ヨーロッパは第一次歐洲戰爭の結果たるベルサイユの體制は反動的で非常に無理があつたものですから遂に今日の破局を來たしました。今度の戰爭が起きると、先づ英國側の方では、學者や、評論家が、今度の戰爭に勝つたならば吾々は斷じてベルサイユの體制に還すのではない。ナチは打倒しなければいかぬ。あゝいふ獨裁的の者は人類の平和の爲に打倒して、吾々の方針である自由主義の信條に基く新しいヨーロッパの聯合體制を採らうと

いふことが大體英國の知識階級の輿論と云はれて居ります。ドイツ側はどうであります。去年の秋と思つて居りますが、トルコ駐劄のドイツ大使フォンパーペンがドイツに歸る途中にイスタンブールで新聞記者にドイツの戰爭目的如何といふ質問を受けた。ナチでないのでありますから、比較的愼重な態度を採らなければならぬパーペンが、言下に「ドイツが勝つたならばヨーロッパ聯盟を作るのだ」と申しました。ナチスの世界觀である所謂運命協同體を指導原理とするヨーロッパ聯盟を造るのが、ヒットラーの理想であるだらうと思ひます。佛國屈伏後に於けるドイツの態度から見ても此事は間違ないと信ぜられます。過去の第一次歐洲戰爭が終りましてから、オーストリアのクーデンホーフが汎歐羅巴といふことを唱道しまして、フランスのブリアン、ドイツのストレーゼマンといふ政治家もその實現に熱意をみせたのでありますが、とうとうそこ迄いかないで有耶無耶になつたのでありますが、今度大破局に當つて再び深刻に、今度はヨーロッパの聯合體を造るといふことがヨーロッパ人の氣持になりつゝあるものと思ひます。

最後に東亞であります。目下日本と支那は東洋では未だなかつた大戰爭を繼續して居ります。併しこの戰爭も結局は日支兩國が本當に提携する爲の惱みなのです。日本は朧氣ながら近衛聲明以來それを認識して居ります。近衛聲明以來ではありません。開戰當初から聖戰と唱へられたのがそれであります。如何なる犧牲を拂つても吾々は代償を求めるのでない。本當の日支の新しい提携の方針を確立すればよろしいといふことは、今日本の信念になりつゝあります。明治維新後民族國家を完成する爲め、他民族を輕視する傾向の强かつた事は否定出來ません。臺灣、朝鮮、滿洲、支那に於て遺憾ながら他民族の心を摑み得なかつた最大原因は此處にある事を深く反省する事が事變處理、昭和維新、東亞聯盟結成の基礎條

件であります。中華民國でも三民主義の民族主義は、孫文時代のまゝではなく、此事變を契機として新しい世界の趨勢に卽應したものに進展することを信ずるものであります。今日の世界的形勢に於て科學文明に起ち遲れた吾々東亞の諸民族が、本當に西洋人と太刀打ちしようと思つたならば、我々は吾々の精神力、道義力に依つて提携するのが最も重要な點でありますから、聰明なる日本民族も漢民族ももう間もなく大勢を達觀して心から諒解するやうになるだらうと思ひます。

もう一つ大英帝國と云ふブロックが現實にはあるのであります。カナダ・アフリカ・印度・濠洲・南洋の廣汎なる地域を支配して居る大英帝國があります。併し私は是は問題にならないと見て居るのであります。あれは十九世紀で終つたのです。强大な實力を有する國家がヨーロッパにしかない時代英國は制海權を確保して、ヨーロッパから植民地に行く道を塞ぎ、更にヨーロッパの强國同志を絶えず喧嘩さして、自分の安全性を高めて世界を支配して居つたのであります。

所が十九世紀の末から既に大英帝國の鼎の輕重は問はれつゝあつた。殊にドイツは大海軍の建設をはじめ大海軍だけでなく三B政策に依つて陸路ベルリンからバグダッド、エジプトの方に拔けて行かうとする時に、ドイツに對しては制海權のみに依つては怪しくなつて來たのであります。それが第一次歐洲戰爭の根本原因であります。幸にドイツをやつつけました。數百年前世界政策に乘り出して以來スペイン・ポルトガル・オランダを破り、次でフランス、ナポレオンを中心とするフランスに打ち克つて一世紀の間世界の覇者となつて居た英國は、最後にドイツ民族との決勝戰を迎へたのであります。

第一次歐洲戰爭の勝利で遂に永き歐洲諸國家爭覇戰に於て全勝の名譽を獲得しました。然し此名譽を得た時が實はお了ひであつたのです。マアやれやれと思つ

た時に東洋の一角には日本が相當なものになつてしまつた。それから合衆國が新大陸に威張つて居る。もう今日は英帝國の領土は特に强國の日本やアメリカの自己抑制に依つて保持して居るのです。英國の獨自の實力に依つて保持して居るのではありませぬ。

申す迄もなくカナダその外南北アメリカの英國の領土は、合衆國の力に對して絶對に保持出來ませぬ。シンガポール以東濠洲や南洋は、英國の力を以てしては日本の威力に對して斷じて保持出來ない。印度も寧ろソビエットか、日本の力が英國の力以上であります。本當に英國の所謂無敵海軍を以て確保出來るのはせいぜいアフリカの植民地だけであります。大英帝國はもうベルギー・オランダ並に歴史的惰性と外交的駈引に依つて、自分の領土を保持して居る所の老獪極まる古狸でございます。二十世紀の前半期は英帝國崩壞史だらうと私共言つて居つたのですが、今次歐洲大戰では驚異的に復興したドイツの爲めに其本幹に電擊を與へられ、大英帝國もいよいよ歴史的の存在となりつゝあります。

此の國家聯合の今日の時代は英帝國の樣な分散した狀態ではいけないので、どうしても地域的に相接觸したものが一つの聯合體になることが世界歴史の運命だと考へるのであります。そして私共は第一次歐洲戰爭以後の國家聯合の時代は、此の次の世界戰爭の爲め準決勝時代だと觀察して居るのであります。先申しました四つのものが第二次歐洲大戰以後は恐らく日・獨・伊卽ち東亞と歐洲の聯合と米洲との對立となり、蘇聯は巧みに兩者の間に立ちつゝも大體米洲に多く傾く樣に判斷せられますが、我々の常識から見れば結局二つの代表的勢力となるものと考へられるのであります。どれが準決勝で優勝戰に殘るかと云へば、私の想像では東亞と米洲が殘るだらうと思ひます。

人類の歴史を見ますと學問的ではない譯でございますが、素人考へで考へて見ると、アジアの西、ヨーロッパの東に起きた人類の文明が兩方に分れて進み、さうして數千年後に太平洋と云ふ世界最大の海を境にして今顏を合はしたのです。此の二つが最後の決勝戰をやる運命にあるのではないでせうか。軍事的にも先申しました一番決勝戰爭の困難なのは太平洋を差挾んだ兩集團であります。此の軍事的見地から云つても私は恐らく此の二つの集團が準決勝に殘るのぢやないかと考へるのであります。

さう云ふ見當で想像して見ますと、蘇聯は非常に勉强して人類の爲には自由主義時代から全體主義時代に飛躍する時代に、率先幾多の犧牲を拂ひ幾百萬の血を流して、今でも國民に驚くべき大犧牲を强制しつゝ、スターリンは全力を盡して居りますけれども、どうも是は瀬戸物のやうではないか。堅いけれども落すと割れさうだ。スターリンが若しもの事があつたならば內部から崩壞して了ふのではないか、非常にお氣の毒でありますけれども。

それからヨーロッパの組はドイツ、アングロサクソン、それにフランス等皆相當なものです。兎に角偉い民族の集りです。併し偉くても場所が惡い。確に偉いけれどもそれが隣り合せて居る。幾ら運命協同體を作らう、自由主義聯合體を作らうと云つた所で考へは宜しいが、どうも喧嘩はヨーロッパが本家本元であります。その本能が何と云つても承知しない、毆り合ひを始める、因業な話で共倒れになるのぢやないか、ヒットラー統卒の下に有史以來未曾有の大活躍をして居る友邦ドイツに對しては、誠に失禮な言ひ方と思ひますが何となくこの樣に考へられます。ヨーロッパ諸民族は特に反省する事が肝要と思ひます。さうなつて來ると、どうもぐうたらのやうな東亞の我々の組とそれから成金ものみたやうでキザ

だけれども若々しい米洲、此の二つが大體準決勝に殘るのぢやないか、此兩者が太平洋を差挾んだ人類の最後の大決戰、極端な大戰爭をやりまして、その戰爭は長く續きませぬ。至短期間でバタバタと片が付く、さうして天皇が世界の天皇で在らせらるべきものか、アメリカの大統領が世界を統制すべきものかと云ふ人類の最も重大なる運命が決定せられるであらうと思ふのであります。卽ち東洋の王道と西洋の覇道の何れが世界統一の指導原理たるべきかゞ決定せらるゝのであります。

悠久の古より東方道義の道統を傳持遊ばされた天皇が、間もなく東亞聯盟の盟主、次で世界の天皇と仰がるゝは吾等の堅い信仰であります。然し特に日本人に注意して頂き度いのは、天皇が東亞聯盟の盟主と仰がれても、日本が自ら盟主ではあると主張することはいけません。日本の國力が增進するにつれ、國民は特に謙讓の德を守り、最大の犧牲を甘受し、東亞諸民族が心より天皇の御位置を信仰するに至るを妨げぬ樣心掛けねばなりませぬ。天皇が東亞諸民族から盟主と仰がるゝ日卽ち東亞聯盟が眞に完成した日であります。

さればさう云ふ時が何時來るか、是もマア占ひの樣なもので科學的だとは申しませぬが、全く空想でもありませぬ。再三申しました通り西洋の歷史を見ますと、戰爭術の大きな變轉の時期が、同時に一般の文化史の重大な變化の時期であります。斯う云ふ考へで年數を考へて見ますと中世は約一千年位、それからルネッサンスからフランス革命迄はマア三百年乃至四百年、是も觀方に依つて色々の說もありませうが大體斯う云ふ見當であります。フランス革命から第一次歐洲戰爭迄は明瞭に百二十五年であります。千年、三百年、百二十五年、第一次歐洲戰爭の始めから次の世界戰爭の時期迄どの位であるか、千年、三百年、百二十五年の率

から云ふと今度はどの位の見當だらうか、多くの人に聽いて見ると大體結論は五十年內外だらう、と云ふことになつたのであります。餘り是は短いから自然に成るべく長くしたい氣分になり最初七十年とか云ひましたけれども、結局極く長く見て五十年內外だらうと判斷せざるを得なくなつたのであります。

所が第一次歐洲戰爭勃發の一九一四年から二十數年經過して居ります。今日から二十數年マア三十年內外で次の此の大きな世界戰爭の時期に入るだらう、といふことになります。餘りに短いやうでありますが、考へて御覽なさい。飛行機が發明されて三十何年、本當の飛行機らしくなつてから二十年內外、而も飛躍的進歩は此處數年であります。

今年既にアメリカの旅客機は亞成層圈を飛ぶと云ふのであります。成層圈の征伏も最近に實現せらるゝ事と信じます。科學の有ゆる進歩からどんな恐ろしい新兵器が出ないとも云へませぬ。此の見地から此の三十年は私共は最大の緊張を以て擧國一致、否東亞數億の人々が一團となつて最大の能力を發揮しなければなりませぬ。さうして此の世界戰爭の期間はどの位になるだらう。是亦更に空想が大きくなるのでありますが、例へば東亞と米洲と決戰をやると假定すれば先申しました通り始つたら極めて至短期間で片付きます。併し準決勝で兩集團が殘つたのでありますが、他に未だ澤山の相當な國々があるのですから、本當に餘震が鎭靜して戰爭がなくなつて人類の前史が終るのは、卽ち此の世界大戰の時代と云ふものは二十年見當であるだらう。言ひ換へれば今から三十年內外で人類の最後の決勝戰の時期に入り、五十年以內に世界が一つになるだらう。斯う云ふ風に私は算盤を彈いた次第であります。

フランス革命は持久戰爭から決戰戰爭、橫隊戰術から散兵戰術に變る大きな變

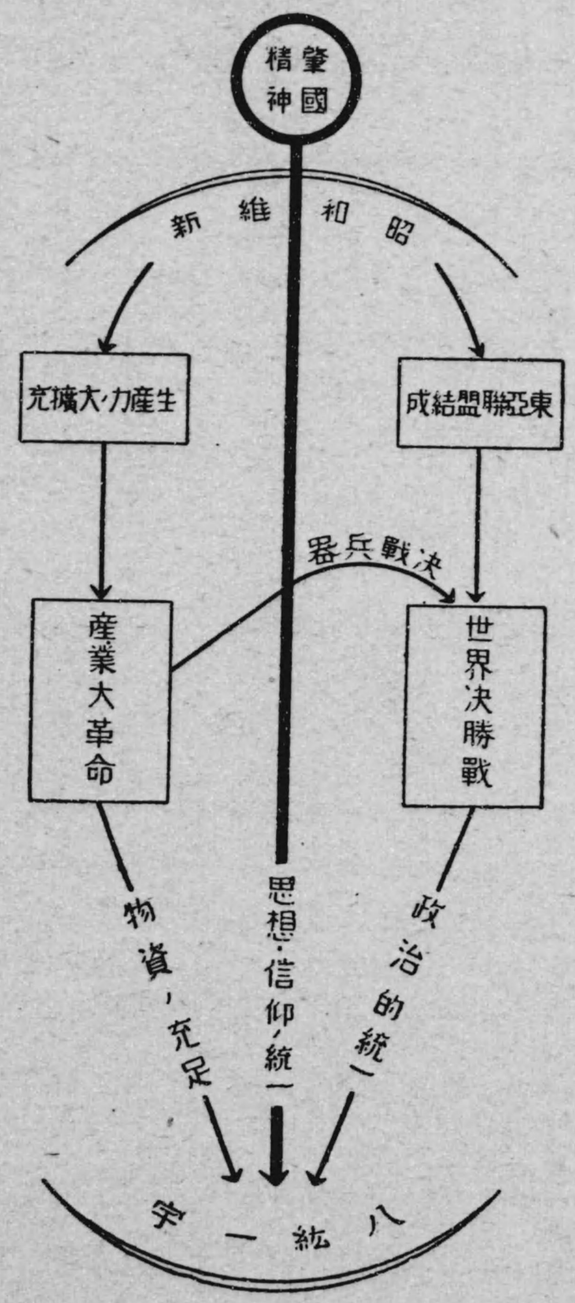
化の時でありました。それが明治維新時代であります。第一次歐洲戰爭によつて決戰戰爭から持久戰爭、散兵戰術から戰鬪群の戰術に變化し、今日はフランス革命以後の大きな革命時代に入つて、現に革命が進行中であります。卽ち昭和維新であります。第二次歐洲大戰で新しき時代が來た樣に考へる人が多いのですが、私共は第一次歐洲大戰により轉回せられた自由主義より全體主義への革命卽ち昭和維新の急進展と見るのであります。

そうして昭和の維新は日本だけの問題ではありませぬ。本當に東亞の諸民族の力を綜合的に發揚して西洋文明の代表者と決勝戰を交へる準備を完了するのであります。明治維新が王政復古にあつたが如く、廢藩置縣にあつた如く、昭和維新の政治的眼目は東亞聯盟の結成にある。滿洲事變によつてその原則は發見せられ、今日は漸く國家の方針とならんとしつゝあります。

東亞聯盟の結成を中心問題とする昭和維新の爲めには二つのことが大事であります(附圖參照)。第一は東洋民族の新しい道德の創造であります。丁度我々が明治維新で藩侯に對する忠誠を天皇に對し奉る忠誠に、はつきり置きかへた如く、此の東亞聯盟を結成する爲には民族の鬪爭、東亞諸國家の對立から民族の協和、東亞の諸國家の本當の結合と云ふ新しい道德を產み出して行かなければならぬのであります。その中核の問題は、滿洲建國の精神である民族協和を實現して行くこと、この精神、この氣持が大切であります。第二に我々の相手になる所のものに劣らざる所の我々の物質的力を作つて行かなければならぬのであります。此の立後れた東亞がヨーロッパ又は米洲の生產力以上の生產力を持たなければならない。

以上の見地から現代の國策は東亞聯盟の結成と、生產能力大擴充といふ二つが

附圖



其中心問題をなして居ります。科學文明の後進者である我々が、此偉大なる生産能力の大擴充を强行する爲めには、普通の通り一遍の方式ではかなひませぬ。何とかして新しい西洋人の及ばざる所の大きな産業上の能力を發揮しなければならぬのであります。此の頃龜井貫一郎氏の「ナチス國防經濟論」と云ふ書物を讀んで非常に心を打たれたのであります。ドイツは原料が足りない。ドイツがベルサイユの體制で虐められて虐め拔かれたことが、ドイツをして本當に奮發せしめまして、二十年此の方、特に十年此の方、ドイツには第二産業革命が發生して居ると云ふのです。一寸其一節を讀んで見ます。（五九頁—六四頁迄）

獨逸の學者は最近二十年に亘れる、特に十年の間に亘つて顯著に進行し來れる所の第二の産業技術に於ける革命を指摘致します。其の第二の産業革命は理論物理學及び應用物理學に於ける科學の革命的進歩と相並行し相錯綜するものであります。就中其の中で獨逸の

學者が採上げて居りますものは電子論であります。吾々が中學校で學びました物理學は、物質の元を探ねまして之を元素と說明して呉れました。酸素・水素・窒素がそれであります。更に其の元を探ねまして、吾々にアトム卽ち分子なるものを說明して呉れました。隨て水が H_2O であると云ふならば是は中學の物理學として滿點であつたのであります。然るに最近此の分子の更に元を探ねまして茲に原子卽ちモレキユールなるものが出來上つたのであります。此のモレキユール卽ち原子が何であるかは、プロトーンと稱する陽電子を中心とし、ノイトロンと稱する中性子が並んで居て、其の周圍を恰も太陽の周りを地球が廻るが如くにエレクトンと稱する陰電子が廻つて居る。恰も宇宙の體系を極く微少に致したるが如き體系それ自體が物質の根本の元なりと云ふ說明が出來上つて來たといふことは御承知の通りであります。之を電子論といふさうであります。更に獨逸の碩學プランケ先生に依つて熱力學が、更に躍進を致しました。此の熱力學に依つて、熱を加へられたる物體は啻に膨張するのみでない。八千度の熱の太陽から熱に依つて放射されるものはエレクトロン(陰電子)であり、而して此の陰電子を地球がマグネットして吸寄せるとした所に、地球を繞る電磁氣學の發展があつたのであります。電子論・熱力學・電磁氣學の發展は、是こそ一方に於きまして合成化學工業を再編成するものであると共に、他方に於て有線・無線電氣工業及び電氣計器工業を躍進せしめ、更に新しき金屬工業を生み、內燃機工業の異常なる躍進と共に精密機械工業を生み、タービン工業の飛躍を生み、而して工作機械工業をして、ヨハンゼンのゲージブロックに依るリミテッドゲージから、更に進んでツアイスの分光器に依る精密度に及び、遂に自動工作機械工業の著しき展開を見るに至りました。之に竝行を致しまして光線化學の工業は著しく進步したのであります。是等一群の現象が、其のあるが儘の進步の進行の過程に於て獨逸に如何なる影響を與へたるやを附言致しまするならば、二十年前の獨逸工業は假令進步したりと雖も、それは常溫常壓に依る所の工業に止まつて居たのであります。然るに今日の獨逸の科學及び產業技術の躍進は根本的なる產業革命を獨逸に齎しました。其の第一は遂に獨逸は常溫常壓工業を高溫高壓工業に變換せしむるを得たのであります。卽ち一切の材料が瓦斯化せられたる材料を處理致しまする爲に、材料たる瓦斯の流動を其の姿に於て把握致しまする計器が必要であります。

其の要求に應じましたるものは電氣計器に依りまする瓦斯流動計であります。又材料たる瓦斯が流動して居ります儘に其の材質の分析が判明することを必要と致します。此の要求に應じたるものが即ち電氣計器としての瓦斯分析表示器であります。斯の如くに致しまして獨逸の工業は高溫高壓工業に躍進を致しました。而て更に第二には、例へば高周波を材料それ自體にかけると云ふ樣な電氣化學工業の發展と結び付きまして、獨逸工業は今や組織的電氣化學工業の成立を見るに至つたのであります。

斯る化學及び産業技術の變革は然らば經濟に關する觀念に如何なる影響を齎したでありませうか、之を逐次檢討致します。第一に原料の考へ方であります。即ち從來の工業は祖先以來敎へられたる一定の材料から利用し得るだけの或る部分を抽き出し之に加工し、殘物は廢物とするか稀に副産物としたものであります。然るに今や斯る産業技術の革命は遂に宇宙一切のものを原料化するに至つたのであります。空中から窒素が取れ、電氣から硫酸が取れる。而て精密機械と相俟つて、醋酸纖維素としてステープル・ファイバーが成立をして來る。即ち第二次産業革命期工業は天然の有する所與(ダス・ゲゲベーネ)、天然の一切の環境(ウムウェルト)それを原料化し、それを原子に至る迄分解し、それを剩す所なく利用して各種の生産品を作出するに至つて居るのでありまして、隨て從來の生産品と副産物の區別は存しなくなるのであります。隨て之を獨逸の代用品工業に就て言ひまするならば、獨逸が代用品を造つて居ると吾々が言ひますれば恐らく獨逸は怒るでありませう。吾々は代用品を造つて居るのではない。天然ゴムよりももつと良いブーナーと稱する新商品を造るのが目的である。羊毛よりももつと良いステープル・ファイバーと稱する新商品を造るのが目的である。今は成程それが完全に行つて居らないかも知らないけれども、自由主義の經濟學者に伺ひます。レーヨンやベークライトは三十年前に生産費が引き合ひましたか、引き合はなかつたでせう。所が今はどうです。引合つて居るではありませんか。逆に自然の原料としてパルプは後何年もちますか。石油は後何年もちますか。假りに相當量がもつとしても、それが漸次世界全體の爲に提供されずに獨占されて來る場合に於ては、相對的に見て原料の不足は必ず來るではありませぬか。其の時になつて騒いでも遲い。其の時にならぬ迄に人類の爲に新しき原料、新しき商品を考へて置くことが、人類

の進歩に對する貢献ではないのか。隨て獨逸は決して戰爭の爲にのみ之をして居るのではない。其の證據には所謂新興工業は軍需工業が一朝有事の場合の爆擊を恐れて國の中心に所在せしめてあるのに反してチェッコや、ポーランドやフランスの國境に置いて居るではないか。戰爭が初まればどうなるか分らない處にそれを置いて居る。又所謂アウタルキーの爲にのみ斯る新興産業をして居るのではない。國民生活の爲に獨逸は出來るだけ舊原料工業と新原料工業の割合を考へて、其の移行を緩徐ならしめて居る。即ち人類の平和の爲に新興工業の試作工業を國策として大規模に遂行してゐるのである。斯樣に說明を致します。即ち茲に展開されたる理論は特定のものを原料とする工業の考へにあらずして、一切のものを原料化せんとする新原料理論に依る工業が茲に展開して來る。是が其の特質の第一であります。

私能く理窟は判りませんが、要するに常溫常壓の工業から高溫高壓工業に、電氣化學工業に變遷をして來る、さうして今迄の原料の束縛から免れて有ゆる物が有ゆる原料で取られる迄に進む所の驚くべき第二産業革命が今進行して居るのであります。それに對する確信が今度ドイッが大戰爭に突進出來たのであらうと思ひます。我々は非常に科學文明が後れて居ります。然し頭は良いのです。皆さんを見ると皆秀才のやうな顏をして居ります。斷然我々の全智能を總動員してドイッの此の科學の進歩、産業の發達を追ひ越して最新の科學、最優秀の産業力を我々は迅速に獲得しなくてはならぬのであります。是が我々の國策の最重要條件でなければなりませぬ。さうしてドイッに先んじて、無論アメリカに先んじて我々の産業大革命を强行するのであります。

此の産業大革命は私は二つの方向に作用を及ぼすと思ふ。一つは破壞的であります。一つは建設的であります。破壞的と云ふのは何かと云ふと、我々はもう既に三十年後の世界最後の決勝戰に向つて居るのでありますが、今持つて居るピー

ビーの飛行機では問題にならない。自由に成層圏にも行動し得るすばらしい航空機が速に造られなければなりませぬ。又一擧に敵に殲滅的打擊を與へる決戰兵器が出來なくてはいけん。此の産業革命によつてドイツの今度の新兵器なんか比較にならない、驚くべき決戰兵器が生産せらるべきであります。それに依つて三十年後の決勝戰に必勝の態勢を執らなければならぬ。ドイツが本當に戰爭の準備をして數年にしかなりませぬ。皆さんに二十年の時間を與へます。餘り過ぎて困るぢやありませんか。

一つは建設方面があります。破壞も單純な破壞ぢやありませぬ。世界大決勝戰で世界の人口の半分位になるかも知れぬが、世界は政治的に一つになる。大きく見ると建設的であります。同時に産業革命の美しい建設の方面は、原料の束縛から離れて我々の必要資材をどんどん造ることであります。我々が最も大事な水や空氣は殆ど喧嘩の種になりません。ふんだんにありますから。水は時々水喧嘩がありますが、空氣喧嘩をして毆り合つたと云ふことは先づ無いのです。必要なものは何でも驚くべき産業革命でどんどんと造ります。持たざる國と持てる國の區別がなくなり、必要なものは何でも出來る事になるのです。

然し之等の大事業を貫くものは肇國の精神、日本國體の精神に對する信仰の統一であります。思想信仰が統一され、政治的に世界が一つになり、此の和かな正しい精神生活をする爲の必要なる物資を、喧嘩して迄爭はなければならないと云ふことがなくなります。そこで眞の世界の統一、卽ち八紘一宇が始めて實現せられるのであらうと考へる次第であります。もう病氣はなくなります。今の醫術はまだ極めて能力が低いのですが、今度本當の科學の進歩は、病氣をなくして不老不死の夢を實現することでせう。

それで東亞聯盟協會の昭和維新論には、昭和維新の目標として約三十年内外に決勝戰が起きる豫想の下に、二十年を目標にして東亞聯盟の生產能力を西洋文明を代表するものに匹敵するものにしなければならぬと云つて之を經濟建設の目標にして居るのであります。その見地から或權威者が米洲の二十年後の生產能力の檢討をして見た所に依りますとそれは驚くべき數に達するのであります。詳しい數は今記憶して居りませんが、大體の見當は鋼や油は年額億瓲以上、石炭に至つては十數億瓲を必要とする事となり、迚も今のやうな地下資源を使つてやる所の文明の方式では二十年後には完全に行詰ります。此見地からも產業革命は間もなく不可避であり、人類の前史將に終らんとすると云ふ觀察は極めて合理的であると思はれるのであります。

今度は少し方面を變へまして宗教上から見た見解を一つお話して見たいと思ひます。非科學的な豫言への我々の憧れが宗教上の大きな問題であります。併し人間は科學的判斷、つまり我々の理性のみを以てしては滿足安心の出來ないものがあつて、そこに豫言や見透しに對する强い憧れがあるのであります。今日本國民はこの時局をどういふ風にして解決するか、見透しが欲しいのです。豫言が欲しいのです。ヒットラーが天下を取りました。それは何者がさうしたかと云ふと、ヒットラーの見透しであります。あの歐洲戰爭の結果ベルサイユ條約で全く行詰つてしまつたドイツは、何人もあの苦境を脫して行く着想が考へられなかつた時に、彼はベルサイユ條約を打倒して必ず民族の復興を果し得る信念を懷いたのであります。大切なのはヒットラーのこの見透しであります。最初氣狂ひ扱ひしましたが、その見透しが數年の間にどうも本當でありさうだと、國民が考へた時にヒットラーに對する信頼が出來、さうして今日の狀態に持つて來たのであります。

私は宗教の尤も大事なことは豫言であると思ひます。

佛教、特に日蓮聖人の宗教が、豫言の見地から見て最も雄大にして精密を究めたものであらうと考へます。外に出て空を見ると澤山星があります。佛教から云へばあれがみんな一つの世界であります。その中にはどれか知りませんが西方極樂淨土といふよい世界もあります。もつとよいのがあるかも知れません。さうしてその世界には必ず佛様が一人居られてその世界を支配して居ります。その佛さまは必ず支配の年代があるのです。例へて云へば地球では今は御釋迦様の時代です。併し御釋迦様は未來永劫、此世界を支配するといふ譯ではないのです。次の後繼者をちやんと豫定して居る。彌勒菩薩と云ふ御方が出て來るのださうです。さうしてその佛様の時代を正法、像法、末法の三つに分けます。正法と申しますのはその佛の教へが最も純に行はれる時代であります。像法はそれに大體似通つた時代であります。末法と云ふのは讀んで字の通りであります。それで御釋迦様の年代は色々異論もあるさうでございますが、大體多く信ぜられて居るのは正法千年、像法千年、末法萬年、一萬二千年であります。

所が大集經といふ御經に更にその最初の二千五百年の詳細なる豫言があるのです。佛滅後、最初の五百年が解脱の時代であります。解脱の時代といふのはどういふのかといふと、佛様の教へを守ると神通力を得る時代であります。靈界の事柄が能く分るやうになる。斯ふ云ふ時代であります。人間が純朴で直感力が鋭いのでありますからさういふよい時代であります。今日の大乘經典といふものは、御釋迦様が書いたものでない。御釋迦様が亡くなられてから最初の五百年解脱の時代に色々な人に依つて書かれた譯です。私はそれを不思議に思ふのです。長い年月かゝつて色々の人が書いた御經に大體大きな矛盾がない。一つの體系のある

といふことは靈界に於いて相通ずるものがあるからさういふことが出來るのだらうと思ひます。大乘佛敎は佛の說ぢやない。とて大乘敎を輕視せんとする人もありますが、大乘敎典が佛說でない事が却つて佛敎の靈妙不可思議を示すものと考へます。

その次の五百年は禪定の時代で、昔の解脫の時代程人間が眞直でなくなりますから、禪定といふことに依りまして兎に角悟を開く時代であります。以上千年が正法です。その正法千年は、大體冥想の國印度で盛んに行はれた。さうして佛敎が遍く全印度に普及して印度の人間を救つたのであります。

その次に像法の最初の五百年は讀誦多聞の時代であります。敎學の時代であります。つまり佛典を研究し、佛敎の理論を研究しまして安心を得ようとする時代であります。冥想の國印度から組織の國、理論の國支那に來たのはこの像法の初め、敎學時代の初めなんです。さうして印度で雜然と說かれた所の萬卷の御經を、支那人の大陸的な根氣に依つて何回も何回も讀みこなして、それに一つの體系を與へたのであります。その最高の仕事をしたのが天台大師であります。天台大師はこの敎學の時代に生れた人であります。天台大師の佛敎の組織は、現在信仰をされてゐる多くの宗派はそれに對して餘り大きな異存はないのであらうと思ひます。その次の像法の後の五百年は多造塔寺の時代・卽ちお寺を澤山造る時代、つまり立派なお寺を造り、素晴しい佛像を本尊とし、名香を薰じ、それに綺麗な聲で御經を讀む。さういふ佛敎藝術の力に依つて滿足を得て行かうといふ時代であります。

この時代になつて來ますと佛敎は實行の國日本に入つて來ます。さうして奈良朝・平安朝初期のあの優れた佛敎藝術はこの時に生れたのであります。

それからその次の五百年末法最初の五百年は鬪諍時代であります。この時代になると鬪諍が盛んになつて普通の佛敎の力はもうなくなつてしまふ。と御釋迦樣が豫言して居るのであります。末法に入つて間もなくそこの叡山の坊さんは捩鉢卷で山を降りて來て、三井寺を燒打にし遂には山王樣のお御輿を擔いで都に亂入する迄になりました。豫言の通り說敎すべき坊さんが拳骨を振ふ時代になつて來たのであります。佛敎では佛は自分の時代に現れる所の有ゆる思想を說き、さうしてその敎への弘まつて行く經過を豫言して居なければならない譯であります。が、一萬年の御釋迦樣が二千五百年で誤魔化して居るのです。さうして自分の敎はこの二千五百年の間でもう駄目になつてしまふ。斯う云ふ無責任なことを云つて大集經の豫言は終つて居るのであります。

所が天台大師が佛敎の最高經典であると云ふ法華經で、佛は其の鬪諍の時代に自分が使を出す、節刀將軍を出す。其の使者は斯う斯う云ふことを履み行つて斯う云ふ敎を弘めて、それが末法の長き時代を指導するのだと豫言して居るのであります。言ひ換へて見れば二千五百年以後の末法では迚も世の中が複雜になつて、一々言つても分らないから其の時には自分が節刀將軍を出すから其の命令に服從しろ、斯う云ふことを言つて御釋迦樣は亡くなつて居るのでありますが、末法になつてから二百年ばかり過ぎた時に佛の豫言に依つて日本に然もそれが承久の亂、卽ち日本が未曾有の國體の大難に際會した時にお母さんの胎內に受胎せられた日蓮聖人が承久の亂に疑問を懷きまして佛道に入り、法華經で豫言せられた本化上行菩薩であると云ふ自覺に達し、法華經に從つて其行動を律せられ其豫言を全部自分の身に現はされた。而して內亂と外患があると云ふ御自身の豫言が日本の內亂と蒙古の襲來に依つて的中したのであります。

それでその豫言の實現に伴ひ逐次御自分の佛敎上に於ける位置を明らかにし、豫言の的中全部終つた後、自ら末法に遣はされたる釋尊の使者本化上行だと云ふ自覺を公表せられ、日本の大國難である弘安の役の終つた翌年に亡くなられたのであります。さうして日蓮聖人は將來に對する大きな豫言をして居ります。それはどう云ふことであるかと申しますと、日本を中心として世界に未曾有の大戰爭が必ず起る。其の時に本化上行が再び世の中へ出て來られ、本門の戒壇を日本國に建て、茲に日本の國體を中心とする世界の統一が實現せられるのだ。斯う云ふ豫言をして亡くなられて居るのであります。

で、私のやうな素人が斯う云ふことを言ふのは甚だ僭越でありますが、日蓮聖人の敎義は本門の題目、本尊、戒壇の三つであります。題目は眞先に現され本尊は佐渡に流されて現はし、戒壇のことは身延で一寸云はれたが、時が未だ來てない。時を待つべきなりと言つて亡くなられたのであります。と申しますのは戒壇は日本が世界的の地位を占める時に始めて必要な問題でありまして、足利時代や德川時代にはまだ時が來てゐなかつたのであります。それで明治時代になりまして日本の國體が世界的意義を持ちだした時に昨年なくなられた田中智學先生が生れて來まして、日蓮聖人の宗敎の組織を完成し、特に本門戒壇論、卽ち日本國體論を明らかにしたのであります。それで始めて佛敎、卽ち日蓮聖人の敎義は明治の御代になつて田中智學先生に依つて全面的に、組織的に明かにされたのであります。

所が不思議なことには、日蓮聖人の敎義が全面的に明かになつた時に大きな問題が起きて來たのです。佛敎徒の中に佛滅の年代に對する疑問が出て來たのであります。どうも是は大變なことで、日蓮聖人は末法の初めに生れて來なければな

らぬのに、最近の歴史的研究では像法に生れて來られたらしい。日蓮聖人は豫言せられた人でないといふ事になるのであります。日蓮聖人の門下は歴史が曖昧で判らない。どれが本當か判らないと云つて自ら慰めて居るのであります。併しそれは今日の信者は結構でせう。さうでない人は信用しない。一天四海妙法は夢となります。

此の重大問題を日蓮聖人の信者は曖昧にして過して居るのであります。それで素人の私が身の程も省みずそれを考へるのでありますが、日蓮聖人の豫言によれば本化上行は二遍出て來るのです。一回は僧となつて正法を弘める、一回は賢王として御現れになつて世界を統一される。經文によれば上行は末法の初めの五百年に出るのです。そこで考へて見ると日蓮聖人は前者、即ち僧となつて現れて來られたのです。僧となつて佛法を說く、即ち觀念の仕事であります。明治の時代迄は佛教徒全部が日蓮聖人の生れた時代は、末法の初めの五百年だと信じて居つたのであります。其の時に日蓮聖人が未だ像法だ。と言つたつて通用しない。末法の始めとして行動せられたのは當り前であります。佛教徒が信じて居りました年代の計算に依りますと、末法の最初の五百年は大體叡山の坊さんが亂暴し始めた頃から信長の頃迄であります。信長が法華や門徒を虐殺しましたが、あの時代は坊さん連中が暴力を振つた最後であります。大體佛の豫言が的中した譯であります。

所が天皇として世界を統一せられるのは觀念の問題でありませぬ。生々しい現實の問題です。王法の問題です。本化上行が僧となつて現れる時の鬪諍は、主として佛教の中の爭であり、本化上行が賢王として現はれる時の鬪諍は世界の全面的戰爭であるべきだと考へます。さう云ふ考へで今は佛滅後何年であるか、歴史

上六ケしい議論もあるらしいのでございますが、先づ常識的に信じられて居る佛滅後二千四百三十年見當と云ふ見解をとつて見ますれば、末法の初めは西洋人がアメリカを發見し印度にやつて來た時であります。卽ち東西兩文明の爭ひが始り掛けた時であります。その後東西兩文明の爭ひが段々深刻化して、正にそれが最後の世界的決勝戰にならうとして居るのであります。

明治の御世、卽ち日蓮聖人の敎義の全部が現れ了つた時に始めてそこに年代の疑問が起きて來たことが、私は佛樣の神通力だらうと信ずるのであります。末法の最初の五百年を巧みに二つに使ひ分けをされた。今度世界の統一は本當の歷史上の佛滅後二千五百年に終焉すべきものであらうと私は信ずるのであります。さうなつて參りますると、今日以後佛敎の考へる世界統一迄は約六、七十年を殘されて居る譯であります。私は戰爭の方では今から五十年と申しましたが、不思議に大體似た事になつて居ります。あれだけ豫言を重んじた日蓮聖人が、將來世界の大戰爭があり、それに依つて世界は統一され本門戒壇が建つと云ふ豫言をせられて居られるのに、それが何時來ると云ふ豫言はやつて居ないのであります。果して然らば無責任と申さねばなりません。けれども是は豫言の必要がなかつた譯です。ちやんと判つて居るのです。時來つて佛の神通力に依つて現れる時を待つて居つたのです。さうでなかつたら日蓮聖人は何時だと云ふ豫言をして居られるべきものだと信ずるのであります。

是に對して法華の專門家はそんな素人のいゝ加減なことはなつて居ないといはれるだらうかと存じますが、私の最も力强く感ずる事は日蓮聖人以後の第一人者である田中智學先生の獅子王全集の中に、大正八年の或る講演で「一天四海皆歸妙法は四十八年間に成就し得ると云ふ算盤を彈いて居る」（獅子王敎義篇第一輯三六

七頁）と書かれて居ります。大正八年から四十八年位で世界が統一せられると言つて居ります。どう云ふ算盤を彈かれたか書いてありませぬが、田中先生は天台大師が日蓮聖人の教を準備せられる如く、時來つて日蓮聖人の教義を全面的に發表した。即ち日蓮聖人の教を完成した豫定せられたる人でありますから、此の一語は非常な力を持つて居ると信ずるものであります。

又日蓮聖人は印度から渡來して來た日本の佛法は印度に歸つて行く。而して永く末法の闇を照すべきものと豫言して居るのであります。日本山妙法寺の藤井行勝師が此豫言を實現すべく長らく印度に行つて太鼓を叩いて居つたのであります。所が支那事變が勃發すると英國の宣傳が盛んであつて、日本がどうも苦戰して危いと云ふ印象を印度人が受けたものであります。そこで藤井行勝師と親交のあつた印度の「耶羅陀耶」といふ坊さんが、日本が負けると大變だ。自分が感得して居る佛舍利があるからそれを日本に納めて貰ひたい。と賴まれて行勝師は一昨年歸つて來てそれを陸海軍に納めたのであります。其の行勝師の話に依るとセイロン島の佛教徒は、やはり佛滅後二千五百年に佛教國の國王に依つて世界が統一せられると云ふ豫言を堅く信じて居るのであります。其の年代はもうセイロンの計算では間もなく來るのであります。さうして其の見地から色々豫言を讀んで、今日の我が皇太子殿下が世界を統一せられる所の王樣であらせらるると堅く信じて、殿下の御寫眞をセイロンの佛教徒が拜んで居る。とのことであります。そこで萬一日本が負けては大變だといふので佛舍利を日本に納めることになつたのであります。

以上のものを綜合的に考へて見ますと、軍事的から見ましても、政治史の大勢から見ましても、又科學・產業の進歩から見ましても、信仰の上から見ましても、

人類の前史は將に終らんとして居ることは確實であります。さうして其の年代は數十年内に切迫して居ると見なければならぬと思ふのであります。今は人類の歴史で一番重大なる時期であります。

世の中には此の支那事變を非常時と思つて、之が終れば和かな時代が來ると考へて居る人が今日もまだ相當あるやうです。そんな小つぽけなものではありませぬ。昔は革命と革命との間には相當長い非非常時、即ち常時があつたのでありまます。フランス革命から第一次歐洲大戰の間にも一時は可なり世の中は和かでありました。第一次歐洲大戰以後の革命時は未だ安定しません。然し此革命が終ると引きつゞき次の大變局、即ち人類の最後の大決勝戰が來る。今日の非常時は次の超非常時と隣り合はせであります。今後數十年の間は人類の歴史の根本的に變化する所の最重大な時期であります。私は此の事を國民が認識すれば餘り難しい方法を用ひなくても自然に精神總動員は出來ると思ひます。

で、吾々東亞が假りに準決勝に殘り得るとして誰と戰ふか。私は先に米洲ぢやないかと想像致しました。併し能く皆さんに了解して戴きたいのは、今は世界の國と國との戰爭は多く自分の國の利益の爲に戰ふものと思つて居ります。今日、日本とアメリカは睨み合ひであります。或は戰爭になるかも知れませぬ。彼等から見れば蘭印を日本に獨占されては困ると考へ、日本から云へば何だアメリカは自分勝手のモンロー主義を振り廻しながら東亞の安定迄に口を入れるとは怪しからぬと云ふやうな譯で、多くは利害關係の戰爭でありませう。私はそんな戰爭を彼れ是れ言ふて居るのでありませぬ。世界の決勝戰と云ふのはそんな利害丈けの問題ぢやないのです。世界人類の本當に長い間共通の憧れであつた世界の統一、永遠の平和を達成する爲に私共は成るべく戰爭なんといふそんな亂暴な、殘忍な

ことをしないで、双に衒らずしてさう云ふ時代の招來を熱望するのであります。併しどうも遺憾ながら人間と云ふものは餘りに不完全であります。理窟のやり合ひや道德談議だけでは此の大事業は出來ないらしいのです。世界に殘された最後の選手權を持つ者が、最も眞面目最も眞劍に戰つて、其の勝負に依つて始めて世界統一の指導原理が確立せらるゝ譯であります。だから數十年後に迎へなければならぬと私共考へて居る所の戰爭は、全人類の永遠の平和の爲己むを得ない大犧牲であります。

私共假りに或はヨーロッパの組とか、或は米洲の組と決勝戰をやることになりましても、斷じて彼等を憎み、彼等と利害を爭ふ譯でありませぬ。恐るべき慘虐行爲が行はれるのですが、根本の精神は丁度武道大會に兩方の選士が出て來て一生懸命にやるのと同じことであります。人類文明の歸着點は、吾々の全能率を發揮して正しく堂々たる爭ひに依つて神の審判を受けるのであります。

吾々東洋人としては斷えず此氣持を正しく持ち、苟しくも敵を侮辱するとか、敵を憎むとか云ふことは絕對にやるべからざること、敵を十分尊敬し敬意を持つて堂々戰はねばいけませぬ。

又或る人がかう云ふのです。君の云ふことは本當らしい、本當らしいから餘り云ひ觸らすな、向ふが準備するからコッソリやれと、是では東亞の男子ぢやありませぬ。東方道義ではありませぬ。宜しい、準備をさせやう、向ふも十分準備をやれ、さうしてこつちも準備をやり、堂々たる戰をやらなければならぬ。かう思ふのであります。

併し私茲に斷つて置かねばならぬのは、かう云ふ時代の大きな意義を一日でも早く達觀し得る聰明な民族、聰明な國民が結局世界の優者たるべき本質を持つて

居るのであります。其の見地から私は昭和維新の大目的を達成する爲に、吾々として此の大きな時代の精神を一日も速かに、全日本國民と全東亞民族に了解せしめることが私共の最も大事な仕事であると確信するものであります。これで終ります。

（完）

本書は昭和十五年五月二十九日石原中將が京都義方會に於て講演せられし筆記で其後歐洲大戰の進展により若干追補せられたるものである。

東亞聯盟協會綱領

一、本協會ハ萬邦協和ニヨル世界絶對平和ノ確立ヲ究極ノ理想トス

一、本協會ハ王道ニ基キ國防ノ共同、經濟ノ一體化、政治ノ獨立ヲ條件トスル東亞聯盟ノ結成ヲ唱道ス

一、本協會ハ國防國家完成ノ爲メ內外一途ノ革新政策ノ實現ヲ期ス

東亞聯盟協會規約

第一條　本協會ハ東亞聯盟協會ト稱シ、事務所ヲ東京ニ置ク

第二條　本協會ハ綱領ノ實現ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條　本協會ノ綱領ニ贊成シ、且ツ所定ノ入會手續ヲ經タルモノヲ普通會員トス、本協會ノ精神ヲ體得シ、本運動ノ中核タルモノヲ以テ參與會員トナス、其ノ

選衡方法ハ別ニ之ヲ定ム

第四條　本協會ハ本協會ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ

一、月刊誌「東亞聯盟」、パンフレット、其ノ他出版物ノ刊行

二、講習會、講演會、研究會、座談會ノ開催

三、東亞聯盟問題其ノ他必要事項ニ關スル研究調査

四、本協會ト目的ヲ同ジウスル內外諸團體トノ連絡提携

五、其ノ他必要ト認ムル事項

第五條　本協會會務ハ參與會員ノ合議ニ依リテ行フ

第六條　本協會ニ顧問、客員ヲ置クコトヲ得

東亞聯盟協會東京事務所
東京市赤坂區溜池五番地富士ビル內
電話赤坂(48)〇六五八番

入會申込書

私儀貴協會の趣旨に贊同入會致し候

昭和　年　月　日

住所

職業

氏名

生年月日

東亞聯盟協會　御中

戰爭進化景況一覽表

時代		戰爭ノ性質	兵制	戰鬪 隊形	戰鬪 指揮單位	年數	政治史ノ大勢
古代		決戰戰爭	國民皆兵	方陣	點	大隊		國家ノ對立ヨリ統一ヘ
中世							1000	宗教支配
近代	火器使用以後	持久戰爭	傭兵	橫隊	實線	中隊	300乃至400	新國家ノ發展
	佛國革命以後	決戰戰爭	國民皆兵	散兵	點線	小隊	125	國家主義全盛
現代	歐洲大戰以後	持久戰爭	國民皆兵（全男子）	戰鬪群	面	分隊	50內外	國家聯合
將來	世界大戰	決戰戰爭	國民皆兵（全國民）		體	個人		世界統一

昭和十五年九月五日印刷
昭和十五年九月十日五千部發行
昭和十五年九月二十日五千部發行

「世界最終戰論」
(停)定價金四十錢
送料金六錢

編纂者　東亞聯盟協會關西事務所
　　代表　福島清三郎
發行者　東京市京橋區銀座西二ノ一
　　立命館出版部
　　代表　竹上孝太郎
印刷者　京都市上京區上樋木町千本東入
　　橋本岩太郎

不許複製

發行所　京都市上京區廣小路寺町東入
　　東京市京橋區銀座西二ノ一
　　立命館出版部
　　電話上四八六二番　振替大阪二六九四四番
　　電話京橋五六〇六番　振替東京七五三六二番

〔東京〕東京堂・栗田・大阪屋號　〔大阪〕盛文館・福音社・柳原
〔名古屋〕川瀬・星野　〔九州〕大坪・菊竹　〔各地〕丸善支店
〔滿洲〕滿配・大阪屋號

立命館出版部新刊重版好評書（昭和十五年八月現在）

陸軍中將 石原莞爾 著

滿洲建國と支那事變〔廿版〕

價・二〇　送・〇六

△問題の書、支那事變解決大目標　著者石原莞爾將軍は我國陸軍唯一の戰術家である。卷頭に滿洲建國の根本大精神をとき、支那事變の性質を究明し、如何に支那事變を處理すべきかを滿洲建國の經驗より解決し、近衞聲明の眞相に觸れたる歷史的緊要出版なり。

杉浦晴男 著

東亞聯盟建設綱領〔卅五版〕

四六判　一〇〇頁
價・五〇　送・〇六

【前陸軍大臣板垣征四郎閣下題字】問題の書國民必讀…支那事變解決の重大目標【重要目次】△東亞聯盟の必然性△その概念△その範圍△結成の基礎條件△國防の共同△經濟の一體化△政治の獨立△結成の指導原理△聯盟の政治組織△東亞聯盟の各國家（日本皇國…國防の擔任…經濟建設の指導…昭和維新△滿洲帝國…獨立の理由…責務…完成△中華民國民國の聯盟加入…當面の責務…獨立完成）。

法學博士 田村德治 著

日本と新國際主義

四六版上製四一五頁
價一・八〇　送・一四

人生・社會・國家・國交の責任などに歸する根本理論

今や一億の同胞が鐵の圍結と火の信念とを以て東亞新秩序建設の步武を進めつゝある秋、思想界の至寶田村博士は敢然象牙の塔より街頭に立ち、東亞協同體の本質を說いた。諸原理・諸主義を統合し、外來の理論に據ることなく、人生・社會・國家・國交等の基礎的問題を事變に關聯して純日本的理論を展開してゐるが、實に事變以後の應急の構想によるものではなく、十星霜の久しき思索に立脚してゐる。學問報國の絕對不動の信念を抱いて眞正日本主義を絕叫し、皇國精神の眞髓を穿つた一大論文として、一億同胞の生御靈に感應する劃期的名著として、敢て江湖知識層の淸鑑を望む。

立命館大學敎授 田中直吉 著

歐洲大動亂と東亞聯盟〔三版〕

四六判二六一頁
價一・五〇　上製函入　送・一四

△世界の歷史的大轉換期に直面して、今日東亞は如何なる狀態にあるか。大國家聯盟が對峙する新しき世界に於て、果して東亞がその勝者たり得るであらうか。東亞を防衞し、東亞の繁榮を圖る爲めには日滿支三國を中核とする東亞聯盟を結成する以外に道はない。實にこの東亞聯盟の結成こそ、東亞の先驅者たる我日本民族の歷史的使命である。

【重要目次】△世界の轉換期と東亞聯盟一、歐洲大戰の展望△世界危機現段階△第二次歐洲戰爭勃發の原因二、大戰の勃發と世界の動向△戰局の擴大とバルカン△世界大動亂へて危機△歐洲動亂と東亞△支那事變と國交調整△歐洲大戰と新日本外交△蘭印問題と東亞聯盟△大戰の歸趨と印度の獨立△新日本外交論三、新東亞の建設△中支建設の現地報告△北支建設の現狀△支那租界論△新中央政府とその課題△事變處理の指導原理四、東亞聯盟の必要性△新生支那を現地に視る

立命館大學敎授 田中直吉 著

世界政局と東亞新秩序

四六判上製　二三一頁
價一・三〇　送・一〇

今日世界大戰の危機はいよ〳〵切迫し「一九一四年の前夜」にある。獨逸はウクライナを目ざして東進政策を續け、伊太利はバルカン・アフリカへ膨脹しつゝある。而して獨・伊軍事同盟に對抗して英・佛・蘇の同盟が形成され、世界は二大陣營に分裂せんとしてゐる。また極東に於ては日・滿・支三國協同の下に新秩序が形成されつゝある。實に世界が新しい秩序を求めて苦惱苦吟しつゝあるこの狂瀾怒濤の時代に、著者は起つてこの一大文字を成した。世界政局を理解し、日本の進路を知らんと欲する江湖の座右に敢てこの新著をすゝむ。

【目次】△第一篇世界政局の動向（歐洲國際政局の展望・世界戰爭の危機等）第二篇支那事變と列强（英米の極東政策と對日共同戰線）△第三篇東亞新秩序の建設（東亞協同體と日本外交等）等

宮崎正義著　東亞聯盟論　定價一圓五十錢　送料十四錢

伊東六十次郎著　東亞聯盟結成論　定價一圓二十錢　送料十四錢

伊東六十次郎著　東亞聯盟の指導原理　定價二十錢　送料四錢

石原莞爾述　滿洲建國と支那事變　定價二十錢　送料四錢

東京市芝區愛宕下
改造社發行

東京市世田谷區下代田二〇三
東亞思想戰研究會發行

東京市銀座西二ノ一
立命館出版部

04.4.40
館合立